

京都部落問題 研究資料センター通信

第29号

発行日 2012年10月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

2012年度 部落史連続講座

～全国水平社をめぐって～

第1回 11月9日（金） 初期水平社の可能性

講師：井岡 康時さん

（奈良県立同和問題関係史料センター）

第2回 11月16日（金） 部落差別撤廃運動と本願寺教団・中外日報

講師：奥本 武裕さん

（奈良県立同和問題関係史料センター）

第3回 12月7日（金） 水平社創立90周年 熱と光を求めて

—水平社創立の思想に学ぶ—

講師：駒井 忠之さん

（水平社博物館）

第4回 12月14日（金） 全国水平社の創立と融和運動

講師：手島 一雄さん

（立命館大学講師）

* * * * *

時間 午後6時30分～8時30分

場所 京都府部落解放センター3階 第二会議室

参加費 無料 ～参加希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

在野の融和運動家・植村省馬（二）

吉田文茂

（高知県部落史研究会）

前号で、自主的な部落差別撤廃運動に取り組んだ高知県出身の植村省馬（以下、省馬と略す）の生涯の前半生を紹介した。不良少年であった省馬が部落問題を自覚し、部落差別撤廃を自己の一生の課題としていく過程を見ていったが、省馬が取り組んだのは授産事業としての洋服裁縫学院の設立と部落差別撤廃を訴える組織としての高知県自治団の設立であった。高知県内の水平運動家も吸収して差別撤廃運動を幅広く展開していきこうとするのだが、その活動資金を省馬個人に依存していたため、洋服裁縫学院の経営が厳しくなり事業を縮小せざるを得なくなると、高知県自治団の活動も困難を極めるようになった。その時、新たな資金源として期待されたのは省馬自身身の灸治活動であった。以前から児童や貧困層に対して無料施灸を実施していたこともあって、省馬の灸は評判がよく、「名士」とされる人びとの間にもその名灸ぶりが浸透していく。そのため、灸治

活動は次第に全国へと広がっていったのだが、それは省馬の部落差別撤廃運動が高知県から全国へ広がっていくことを意味していた。

今号では、高知県から全国へとその活動範囲を広げていった省馬のその後の活動の様子をみていくことにする。なお、前号同様、さまざまなエピソードのなから、省馬の人物を浮き彫りにする出来事を紹介することに心がけたい。

六 一条実孝の高知県訪問騒動

全国へ進出する直前に惹起した一条実孝（公爵）来高にもなう高知県自治団と高知県公道会との軋轢は両者の関係を考えるうえで興味深いものがある。そもそも省馬が一条実孝と知り合ったのは、一条が会長をつとめていた日本社会教育会に省馬が入会したことによる。この日本社会教育会は高知県香美郡山田町（現在の香美市）の被差別部落出身の井上櫻村が「皇室を中心にした同胞相愛の趣旨を徹底する」ために設立した団

体であった。土佐一条家と縁のある一条実孝を訪問して会への協力を依頼したところ、その趣旨に賛同した一条が会長に就任したものであった。この日本社会教育会に入会して井上と知り合い、井上を通じて一条と親しくなったものがある。井上櫻村は本名を井上平吉といい、自由民権運動の闘士として加波山事件で検挙された経歴の持ち主であったが、部落問題に関しては一九二一年に結成された融和団体同愛会の設立に深くかかわった人物でもある。同愛会結成時には井上平八郎と称していたが、短期間で同愛会から離れ、高知へ戻ってきている。その井上を通じて省馬は一条と知り合ったのだが、一九二九年四月には一条の邸宅を借りて四日間華族を相手に灸治をおこなうなど、二人は次第に親密な関係となつていったようである。

一九二九年一月に再度上京した省馬は一条に翌春の高知訪問の約束をとりつける。この時、一条実孝から「四海兄弟」の揮毫ももらい、色紙として頒布するのだが、高知県公道会にとっては公道会抜きに一条の来高をおしすすめる省馬らは邪魔な存在としか映らなかつたようである。『高知新聞』（一九三〇年四月五日）には「何々団（会）等の名称を用い団員（会員）並に

事業資金の募集等をなす者あるもこれ等の多くは融和事業は口に口に過ぎず」と融和事業の名を借りて私利私欲に走る団体への警告と注意の喚起、さらには「近く来県の噂ある一條公爵の揮毫販売に關しても本会は何ら関係なき次第」と、直接名指しこそしなかつたものの、明らかに省馬らの高知県自治団を正当な融和団体とは認めない態度をあらわにしていた。したがって、一条実孝の来高は省馬の個人的要請によるものであるため、高知県公道会としては勝手にやればよい、関知しないという姿勢で事に臨む。

一九三〇年四月七日、井上櫻村らを同伴して船便でやってきた一条実孝はこの日のためにわざわざ新築した省馬の邸宅で一泊し、翌日中村へ出かけた。自邸に公爵の一条を迎えたことに対し省馬はいなく感激して「公爵がわれわれの如き者の家へ泊ってくれるというのは全く前代未聞の事で単に此の一事実だけでも融和事業に対して非常な効果を齎らすものである」と一条の来高が融和事業の推進に有効な力を發揮することを期待しつつ、「此の上は一意専心融和事業のために奮闘して公爵の好意に報いたい」とその決意の程を語っている（『高知新聞』一九三〇年四月

九日)。ただ、逆に高知県公道会との溝は一層深まり、朝日新聞の「天声人語」欄に相当する高知新聞の「小社会」欄は「県公道会と高知県自治団との軋轢は過般の一條公衆によつていよく、極端になつた」として、「昔から喧嘩して得の行つた、めしが無い、宜しく互に仲良く提携してはどうだ」(『高知新聞』一九三〇年四月十八日)と両者の仲直りを促すコメントを載せている。ただ、「小社会」は高知県公道会に批判的で、料理講習会を例に挙げて、「新しい料理の仕方を教へる前に先づ如何にして料理の材料を買はしむべきかについてには考慮すべき」とし、さらに講習会が昼間に設定されていることを皮肉りながら、「モツト実情に即した事業をヨリ以上に考へて欲しい」と、上滑りの公道会の事業を痛烈に批判している。

省馬が活動拠点を高知から全国へ広げていくのは一九三〇年の一条実孝来県以降のことで、同年一月に新たに設立された御聖旨奉賛会はその活動母体となつていく。省馬が徳島や兵庫、東京などに転居すると、その拠点とする場所をかえながら、御聖旨奉賛会の活動は継続していった。御聖旨奉賛会はその名の如く、「聖旨」＝昭和天皇や明治天皇の勅語や誓文の一節の浸透をめざす組織であつたが、会則ではその目的を「御聖旨を奉戴し同胞相愛の実を挙げ国民運動の徹底を計り思想善導に資する」とうたつてゐる。また、奉賛会の実施する事業としては、「講演会、懇談会、研究会の開催並に図書、雑誌新聞、小冊子、其他各種の印刷物を発行」することと多岐にわたつており、「精神の修養」が強調されてゐた。これだけ見ると、御聖旨奉賛会は一種の精神運動とみなすこともできるが、奉賛会のなかに青年男女のための「教育、授産、職業紹介」の部を置き、各部とも無料で実施するとしたのが授産事業をずっと重視してきた省馬らしいところである。教育部は「中等教育以上の夜間、昼間の二部」とし、紹介部は「洋服裁縫、竹工、木工、革工、鉛工、鉄工、理髪、結髪、書生、給仕、官公吏、会社員、店員、看護婦、助産婦、女中」の職種を掲げ、希望者は可能な限り至急紹介して本人に連絡する旨が明記されてゐた。省馬にとつて、教育と仕事の確保は部落差別撤廃を実現していくために欠かすことのできないものと理解されてゐたのである。

七 兵庫県での灸治活動

一九三一年八月一日より一〇月

六日までの二カ月余り、省馬は徳島県の刑務所の作業嘱託をつとめ、その期間をはさむ半年ほど徳島市を拠点とした灸治活動をおしすずめてゐる。その後、一九三二年二月、兵庫県朝来郡中川村(現朝来市)から剣道具の製作講習のため、に請われて引越し、灸治活動と連動させながら、兵庫県内各地での融和宣伝行脚に専心していくこととなる。省馬は、兵庫県加東郡米田村(現加東市)を拠点としながら、御聖旨奉賛会のなかに授産事業本部を設置して、数多くの青年男女に剣道具や柔道着などの製作や販売、修理などの訓練をおこなつていった。事業は着実に成果をあげ、一九三三年五月には、加東郡の青年が兵庫県連合青年団主催の第三回青春創作副業品展覧会に剣道道具一揃を出品し、二等賞を獲得してゐる。

この兵庫県在住期間は一年数カ月におわたるが、兵庫県での生活が一年余り過ぎた一九三三年五月二日に『聖和新聞』という新聞紙を刊行してゐる。体裁は、かつて発行した『融和新報』とほぼ同じで、内容も大枠はそのまま踏襲してゐる。発行兼編輯人は省馬自身であつた。省馬が執筆したと考えられる「発刊の辞」は「解放令布かれて既に一世紀にならんとして居ます。然るに今尚『融和』を声を大にして叫ばなければならぬ事を衷心より悲しむ者であります」に始まり、国際連盟脱退でもめてゐる国際状況にふれながら、「国を挙げて来るべき困難にあたるべき秋、内未だ故無き因襲により、同胞垣に相闘ぐ此の現状をまざく」と見せられる今日、最早不肖を省る暇がありません」と、内外を対比して部落問題が解決してない現状を憂い、率先して問題解決のために立ち上がることを宣言してゐる。『聖和新聞』は第一号しか存在を確認できないが、第四面は兵庫県内各地・各校からの感謝状で埋め尽くされてゐる。そのなかのひとつ、兵庫県清和会神崎郡支部長からの感謝状によると、一九三二年七月一〇日より八月七日までの約一カ月の間に、神崎郡内一八町村の児童および町村民六八七名に対し、「乃木將軍と融和問題」の演題で講演をおこなつてゐる。この「乃木將軍と融和問題」と題した講演の内容は不明であるが、省馬にとつては得意の演題だつたようで、他の地域でもしばしば同じ演題で講演をおこなつてゐる。また、町村民二六三七名に對する施灸と健康法の指導講習も併せておこなわれてゐる。

省馬自身のメモ書きに、一九三二年九月二五日の多可郡中町の被差別部落における融和問題講演会に関するものがある。このメモ書きは、当時の部落問題をとりまく状況と省馬の部落問題への切り込み方をうかがい知ることのできる貴重な資料でもある。省馬は融和問題の講師として招聘されるが、町長の開会挨拶は講演会と講師の両方を頭から否定するものであった。町長曰く、本日の講師（省馬のこと）とは今初めて会うが、事前に融和問題に熱心な人だと聞いている。しかし、わが町では融和問題や改善会、清和会や水平社など全く必要はない。なぜならば、本町は融和が達成できており、実際、自分の子どもも当部落の区長の息子もそろって同じ学校を卒業しているし、何等の区別もなく付き合いしている」と述べて、融和が実現していることを力説した。この町長の挨拶を聞いた省馬は、水平社や清和会など改善や事業開発に取り組む必要性を説き、町長と我々とは立場上大いに異なるうえに、町長は差別を受けた体験がないために融和は不必要と言われるが、それは無理な話で、差別がある以上、我々はまだまだ大いにやらなければならないと反論した。そして、青年の将来を考えるうえ

で、授産事業に奮闘、努力すべきことを自らの体験に基づいて説明した。省馬に続いて、中町第一小学校の教員が部落の子どもの出席率が低い一層の奮発を望む旨の話をしたが、出席者から児童の出席率が悪いのは先生の誠実な対応が見られないことや校長をはじめとする教員の問題行動によるものだと指摘がなされた。さらに、子どもたちの衣服が粗末なことで教員から差別を受けることがあるとの訴えも出されるが、その一方で、省馬に対しては出身地を訪ね、高知と答えると、「高知ハ四国デハナイカ島国ノ者ガナマイキニモ本州ニ来テ融和ヲトクナド不都合千萬デアル」と述べ、続いて「我々ハサベツハウケナイ融和ナドハイラン」「ソウイウコトハ他ノ町村ニ行キテ云へ」と果敢に突っかかってくる出席者もいた。省馬はメモ書きのなかでこの質問してきた人物を「同士」と表現しつつ、その「同士」が「ネテ居ル子ヲオコスヨウナコトヲ云ウナ」と絶叫したと記しているが、「寝た子を起すな」と言う「同士」がその一方で学校の教員の態度は差別だと語る姿に一定の理解を示し、単純に「寝ている」わけではないとの感想を記している。

八 東京への進出

兵庫県を後にして、東京へ進出したのは一九三三年六月二〇日、省馬四六歳の時であった。なぜ、兵庫県を離れて東京へ向かったのか、真意は定かではなく、事業や運動の全国化を図るための東京進出とみなす人もいるが、そう断定するのは資料的に困難である。ただ、東京へ移ると早速に授産場の設立を企図し、聖訓奉旨会常務理事の伊藤末尾の協力をあおいで、同年一〇月一日、武道具などの製作講習を中心にした昭和授産協会を設立している（『植村省馬翁』）。この昭和授産協会は会則の第二条「本会ハ小額生計者ノ職業ヲ補導シ且ツ授産ヲナシ兼ネテ人格ノ修養ヲナサシムル」にあるように、授産事業の実施とそれに付随して人格の修養を図ることを目的とした。最初、東京での住所は牛込区市ヶ谷田町（現新宿区）であったが、授産場の確保のため、城東区大島町（現江東区）にあった府の簡易宿泊所の二階を借りて、東京府社会事業協会後援のもと、事業は開始される。昭和授産協会の役員は顔ぶれは次のとおりである（理事長の宮地は高知県出身）。

理事 中村至道、井上哲男
 植村省馬
 監事 中川節、中島千秋
 顧問 中島資明、中島知道

昭和授産協会は一九三五年から一九三八年までの四年間、社会事業に尽力したという功績によって東京府から金一封の助成金をもらっており、東京府から認知された授産施設として機能していた。

高知時代、省馬は授産事業主体の洋服裁縫学院と精神修養と部落差別撤廃のための高知県自治団を両輪として融和運動を展開したが、東京においても昭和授産協会が文字通り、授産事業実施のための団体であったのに対し、精神修養のための団体としては御聖旨奉賛会が引き続き活用され、のちに同様の趣旨でもって赤心会が組織されるものの、ともに活動としては「名士」の揮毫の販売が目立つ程度であった。高知や兵庫県を拠点としていた頃とはその点が大きく異なっていた。活動の比重は、昭和授産協会を軸とする授産事業へと移っており、かつて盛んであった施灸活動も以前と比べると下火になっていった。

ところで、省馬の遺品の中に、ちりま知里真志保揮毫の「学若不成死な不な婦」の掛軸がある（『植村省馬資

理事長 宮地久衛
 常務理事 伊藤末尾

料集』に掛軸の写真が掲載)。知里真志保と省馬との接点について定かではないが、ある人物を介して知遇を得たと推測できる。藤本英夫『天才アイヌ人学者の生涯』（講談社、一九七〇）によれば、知

里は旧制第一高等学校（一高）に入学すると寮生活を送るようになるが、「寮の空気に不愉快なものがあつた」ため、短時日で退寮し、金田一京助の紹介で海軍中将中島資朋宅に書生として住み込むようになった。ところが、中島中将宅での扱いが知里の「ひげ目」を刺激したという。藤本書には三つのエピソードが紹介されているが、その一つは秋の終り頃に呼ばれて中島の書齋に入っていた時のことであつた。肌寒かつたため、着ていた緋の着物の袖口に両手を入れて腕組みをしている知里を見た中島は、「海軍の下士官は、上官の前では、そんな恰好はしない」と叱責したようである。すると、知里は「私は海軍の下士官ではありません」と答えて自分の部屋に戻つたのだが、ちようど遊びに来ていた元書生の先輩とともに、日頃のうつぶんを晴らした気になり、腹を抱えて笑つたという。これを契機に知里は中島宅を出て別の下宿へ移ることになる。紙面の関係で他の二つのエピソードは省略す

るが、藤本が「ひげ目」と評した知里のプライドはあらゆる場において対等な人間関係を求める孤高の姿勢となつて表れていたように思われる。この点、省馬とは見事に対蹠的である。

省馬の交友関係については詳しくは次号で見ていくが、華族や陸海軍の将校などと親密な関係をずっと保持していた。その際、知里と異なり、最初から対等な関係を相手に要求することなく、周りや他者からは時に卑屈すぎるほどに見える低姿勢で接している。たとえば、『植村省馬翁』の著者である橋詰延寿は師範学校を卒業して赴任した小学校で初めて省馬に出会つたとき、省馬が「ああ新任の橋詰先生よねえ。ポートでちやんと知つています。私はエタ屋ですが校下ですから特にごひいきを願います」と挨拶されたそうである。また、省馬は剣道の有段者で普段は師匠の代理をつとめるほどの腕前であつたが、いざ試合となると一度として勝つたためしになかつた。それは、勝てる試合もわざわざ苦勞して負けてやつていたからである。「負ける名人」と紳名された省馬の真意は、一度の試合の勝敗に執着するよりもむしろ負けることによつて相手に好感を持たせようとしたのである。そして、再度

出会つた時に「あなたにはかなわん」と親しく話をするにより、「一人でも多くの人に接して、同胞達の理解者にする」ことをねらつたのである。省馬個人のみが高く評価されることよりも、被差別部落の人びとに対する理解者を増やすことをめざし、そのことによつて部落差別を撤廃していく道筋を確かなものにしよつたのである。

したがつて、東京での生活においても、たとえば剣道を子どもたちに教えても、謝礼は一切受け取らなかつた。そこで、剣道を習う子どもたちは自分たちで貯めたお金で省馬にプレゼントをしようとするが、それも断られ、逆に省馬に有効な金の使い道を考えなさいと言われた子どもたちは、「満州」へ出向く出征兵士の慰問の一部として寄付することを思いつく。このことが「美談」として、新聞（『東京日日新聞』一九三六年九月二四日）に取り上げられ、省馬の評判は一層高まつていつたようである。このような「美談」が省馬の場合、数多く見られ、徳島刑務所内での武道具製作の指導のなかで親しくなつた「前科三犯」と「前科五犯」の二人からは、出所してからの行き先がないことを相談され、昭和授産協会で武道具の製作に打ち込

ませたりしている。

九 高知へ戻る

一〇年近くに及ぶ東京での生活を終えて高知に戻ることとなるのは一九四二年二月二三日のことであつた。それは、昭和授産協会が府から借用していた建物を返却しなければいけなくなつたためであり、省馬は無理に居座ることはせず、すぐさま郷里へ引き上げることを決意した。すでに、東京在住の時から、高知市内の授産所で軍人遺家族へ剣道具の製作修繕の指導をしていたので、高知へ戻つてもしばらくは高知市内での授産事業に専念しようである。

一九四三年に日下村の新宅に戻つてくるが、それでも自宅を授産所とし、七台のミシンを入れて、軍服（紙のチョッキ）や子ども服、竹製品、下駄の鼻緒等の製造や販売に力を注いでいる。戦後も「引揚者」や「戦争未亡人」に洋服の講習をおこなうなど、最後まで授産事業に全精力を注ぐが、長引く病には勝てず、一九五四年六月二日、高知県友愛会の刊行した『植村省馬翁』の完成を見届けること、静かな眠りについた。享年六八。

（以下、次号）

本の紹介

吉村智博著

『近代大阪の部落と寄せ場』

—都市の周縁社会史—

廣岡浄進

(大阪観光大学)

今年度に入って四月、急転直下、昨年の選挙で府知事から転身した橋下徹大阪市長の強い意向で市政改革プロジェクト「素案」に公益財団法人大阪人権博物館(リバティおおさか)への補助金廃止が盛り込まれ、かろうじて今年度の大阪市と大阪府からの補助金は減額の上で支出されることになったものの、来年度からは「自主運営」を迫られているという猛烈な逆風にさらされている。遅まきながら七月には「リバティおおさかの灯を消す全国ネット」が発足し、ブログ形式のウェブサイトも設置されたし(<http://ameblo.jp/libertyouen/>)、わたしも呼びかけ人に名を連ねたのだが、あまり役に立っていない。まずは、この場を借りて、次のとおり、リバティおおさかを存続させるための支援をお願いしたい。全国ネットでは大阪府知事と大阪市長宛に補助金継続を求める署名

を呼びかけていてブログで用紙を配布している。博物館としては「リバティサポーター」という名称で個人の賛助会員制度を新設し、年間一口六〇〇〇円で募ることにした。郵便振替は、ゆうちょ銀行振替口座 00950-3-102807、名義人は公益財団法人大阪人権博物館である(<http://www.liberty.or.jp/member/supporter.html>)。近いうちに館のホームページからクレジットカード決済もできるようにするとのことである。

本の紹介なのにとと思われる読者もおおいだろうが、関係は大ありで、著者はこの学芸員である。部落史研究だけでも、朝佐武氏、村上紀夫氏、そして著者の吉村氏と、それぞれに単著を世に問うだけの研究能力を備えた陣容の博物館を、橋下徹大阪市長はかつて府知事としてその展示が「子どもたちにわかりにくい」と批判して展

示をリニューアルさせたにもかかわらず、その挙句「暗い」「夢と希望を持ってない」と切り捨てて兵糧攻めで潰そうとしている状況なのだ(http://www.ktv.co.jp/anchor/day/2012_06_20.html)。

さて、わたしにとつては部落史研究の怖い先達でもある吉村氏が、このほど、大阪市立大学の大学院創造都市研究科で博士の学位を取得され、早速その博士論文を単行書として上梓されたのが、この本である。まずは、お祝い申し上げます。

ルポライターの角岡伸彦氏、ちなみに角岡氏もちょうど近著『ピストルと荊冠―被差別―と(暴力)で大阪を背負った男・小西邦彦』(講談社、二〇一二年一〇月)を出されたところであり、その紹介もきつと近々本通信に載るだろうが、その角岡氏が神戸新聞の記者から移って同館の学芸員であった当時、大阪大学の共通教育科目「部落問題論」を非常勤講師として担当しておられ、ゲストとして同僚の吉村氏にご登壇願ったのが初対面である。そのころわたしは大学の五回生か大学院の修士課程だったのだが、部落解放研究会の活動として授業にお邪魔して、と

きどきは授業の手伝いなどでもしていた。その後、わたしのほうには紆余曲折あったのだが、ここ数年は吉村氏とご一緒する研究会があり、静岡大学の黒川みどり氏が代表をされた、連続するふたつの研究会、すなわち都市下層と部落問題(第Ⅱ期)研究会と近代日本とマイノリティ研究会(後者では阿部安成氏と共同代表だった)や、大阪市立大学人権問題研究センター所長の島和博氏が代表となり上杉聰氏が事務局長をされている同和地区関係資料研究会で、マシガンのような吉村氏の発言に接してはそのたびに学ぶところがあるという間柄となつている。本書にも黒川氏の研究会でまとめた論文集に書かれた論文二篇が収録されている。

本書は、『近代大阪の部落と寄せ場』と題するように、西浜という地名で知られた被差別部落と、寄せ場、つまり日傭労働者(著者は「日傭」ではなく「日傭」という表記を採用している)、小稿ではこれに従う)の募集拠点であり宿屋街(ドヤ街)として名高い釜ヶ崎のふたつの地域の近代史を論じている。蛇足だが、西浜は近世には渡辺村という名であり、また役人村とも自称した「かわた」村であり、近代

には西浜町、さらには西浜・栄の二地名でもって呼ばれた被差別部落であり、今日では浪速地区と称されている。そして、リバイティおさかはこの部落に所在した栄小学校が移転した跡地に建設されている。

その目次は、次の通りである。

序章 社会的差別にかかわる歴史的研究の意義

第一部 都市部落の構造と生活

第一章 都市部落史研究をめぐる課題と方法

第二章 西浜部落と学校経営

第三章 西浜部落と学区問題

第四章 西浜部落と皮革産業

第五章 西浜部落と方面委員

第二部 寄せ場の形成と展開

第六章 寄せ場と日傭労働研究をめぐる課題と方法

第七章 釜ヶ崎の形成

第八章 釜ヶ崎の生活構造

第九章 総力戦体制期の釜ヶ崎

第一〇章 社会調査と釜ヶ崎

寄せ場の歴史的的位置づけ

以下、各章の内容を紹介する。序章は、本書の掲げる部落問題と釜ヶ崎との両者を、「社会的差別」という概念でくくり、その歴史研

究の意義を「現代社会の差別問題の本質的な解明に裨益すること」と主張する。その上で、「地域社会との関係性」を次の三つの領域から明らかにすると著者は述べる。第一に、それぞれの地域に内在する関係性、つまり共同体の支配構造などである。第二に、都市政策などの外在的関係性、ここには都市計画や政治などの領域がふくまれる。第三に、部落と寄せ場との相互規定性、著者は相関係とも言い換えつつ、両者は「労働力人口・労働力市場と共同体という問題をめぐって相補的な関係にある」と見通すのであり、両者の「内外における人間の結合関係と双方が社会から強制される排除という視点をとりたい」ので「共同体の形成と変容」を軸に論じるのだと言う。

西浜部落については第一部、釜ヶ崎については第二部でとりあげているのだが、研究史整理については各部の冒頭の章、すなわち第一章と第六章が割かれている。両章とも先行研究を細大漏らさず拾って言及しようとする著者のこだわりがうかがえるし、とても勉強になるのだが、ややまわりくどくも感じる、慎重にすぎるほどの言い回しが選ばれている箇所が少なく

ないので、研究状況に関心のない門外漢には入りづらいかもしれない。

西浜をとりあげた第一部にかかわっては、第一章で次のように研究史を概観する。都市史、とりわけ都市下層社会をめぐる研究史と、近代部落史のとくに地域の権力構造などの枠組み理解に関わる議論と、そして個別西浜をめぐる研究史である。参照されている膨大な文献を思い切って端折って紹介してしまうと、著者は水内俊雄と加藤政洋との師弟による人文地理学の達成に刺激され、その方法に大きな魅力を感じながら、右に記した論点にそくして部落の内部構造や、外部つまり都市行政などとの関係について、明治初年から一九二〇年代までを検討するのだと述べる。ここでは釜ヶ崎への言及はないのだが、第二部冒頭の第六章が釜ヶ崎形成をめぐる研究史を論じている。先取りして見ておこう。

ここでも第一部と同様に水内と加藤とによる解明を到達点と位置づけることで、長町がクリアランスされて木賃宿が移転したのが釜ヶ崎であると説を斥けて、本書は釜ヶ崎の内部構造を考察すると予告する。

このように整理すると読者は、玉井金五と杉原薫との共編著である、あの『大正・大阪・スラム―もうひとつの日本近代史』（新評論一九八六年初版）を思い出すかもしれない。事実、著者はくりかえし、同書に所収の福原宏幸「都市部落住民の労働Ⅱ生活過程―西浜地区を中心に」と木曾順子「日本橋方面・釜ヶ崎スラムにおける労働Ⅱ生活過程」の両論文に言及し、批判を投げかけているのであり、直接には二十有余年を経ても読まれている同書をのりこえるべき壁だとみなしているのだと了解しても、あながち的外れではないだろう。

著者はまず日傭労働の学説史をひもとき、「寄せ場の生活構造」を課題として切り出す。その上で釜ヶ崎の形成史論に分け入るので、ここで問題とされるのが今の日本橋筋界限にあったスラム「長町」（名護町などと表記する史料もある）強制移転説をめぐる論争である。

西浜に話を戻そう。第一部を貫くのは、かつての人民闘争を至上とする研究状況においては等閑視されてきた部落の有産者たる共同体の指導者たちへの再評価である。著者は「名望家」という概念で、部落の共同体を総体としてとらえようとする。

第二章は、西浜の栄小学校の経営を論じ、栄学区の財政基盤となった尿尿売却寄附金つまり大小便汲取り事業に光をあてる。同校は、一八七二（明治五）年に西大組第二十二区小学校として、大阪府で二番目に創立された。学校の設置と運営は学区負担とされ、その財源は当初渡辺村の皮革商高の「八十分之一」を積み立てることになっていたが、一八七六年から下肥売却金が充てられる。近世から摂津国内の農村部の被差別部落五ヶ村に売り渡されてきた経緯を前提に、その後入札制度が導入されても他部落が請け負う仕組みが維持された。設立と学区財政を在地の名望家連が主導したことは勿論ながら、尿尿代金を学区財源とする方法については、当時注目を集めたもの他学区では家々の収入源となっていた戸別汲取りを变えることはできなかったと指摘し、近世以来の部落の構造がこれを可能にしたという。部落をつなぐ紐帯に支えられた堅実な学校財政を明らかにした著者は、身分解放への願いを近代教育に託した西浜の結束を讃えるところにも、その先頭に立った名望家たちの役割を強調する。

第三章は一九一〇年代の西浜をめぐる学区分合問題を検討する。著者はまず、関一市長時代の一九二七年に学区制度が廃止されるまでの間に大阪市で唯一、西浜学区の拡大だけが議論になり、かつ実行されたにもかかわらず、『大阪市史』などの公的な歴史叙述がこの差別事例を黙殺したと指摘する。最終的に隣接する木津北島町を一九二一年に西浜連合学区に編入して栄町と改称されるに至る経緯を、著者は次のように明らかにする。一八七九年に大阪市から西成郡に移されていた西浜町は、九七年の市域拡張で大阪市に復帰する。その後西浜は、皮革業に他部落からの寄留者をうけいれて、近世渡辺村の本村であった木津村の一部をなす木津北島町に拡大していった。木津北島町からは西浜町の栄小学校に通学する児童が多かったが、栄小学校は一九〇八年、財政事情から学区外から通学する児童を退校させた。ところが木津学区は部落児童の転校を拒絶し、その結果八五〇名もの子どもたちが「廃学」の憂き目にあった。分教場の設置も提案されたが、木津学区側は、もはや木津北島町は「特殊部落」だとして西浜学区への編入を求めたのである。浪速警察署長の天野時三郎と新田帯革の新田長次郎らの尽力で市立有隣小学校が一九一

一年に開校したのは、この事態への打開策だったと、著者は位置づける。第四章は新田長次郎、第五章は沼田嘉一郎と、それぞれ西浜の「名望家」を論じる。著者は、新田帯革製造所の創業者として知られる新田が愛媛県を出郷してからの「政商」とされる近代的皮革工場での修業などの経歴や経営の方針および業績を検討し、その堅実さを確認する。一七八頁の表の読みなど、数字の話はよくのみこめないとあるが、職工の待遇においては低賃金により利益が確保される一方で、昇給や人間的接触によって定着させていたなどの評価を下す。ちなみに同社に関しては大阪府水平社が部落民不採用を問題視して糾弾を決議したことが知られているが、著者は不採用説を憶測として斥け、新田の従業員教育を近代的労働者の育成を目標としたものだったと再評価する。

沼田については、その政治活動と主舞台であった方面委員活動をとどめる。和歌山県の部落出身であること、皮革商として財をなし、不動産業にも手をひろげたなどの略歴を押さえる。沼田は市会議員に一九一三年の初当選以来三七年には七選され、さらに併行して国会へと進出して一九二四年と三二二年の選挙で当選し、落選をはさんで三期衆議院議員を務めている。市会では与党に属したが、関市長とは関係がよくなく、一九二〇年代後半からは影響力を大きく喪失したという。市会での発言は党派的な利益誘導の一方で、西浜の実態を念頭に置いた、学区廃止による教育機会の保障や公設市場の設置による消費者物価の抑制などを求める発言も拾える。また方面委員としては「栄方面」を担当し、木津北島町の「細民」救済とそのため医療施設への国庫負担を希望するなどの具体的な提言を、一九三二年に救護法が施行されるまでくりかえしている。三〇年代後半以降は目立った活動が見られなくなるが、現実的な論理を選ぶ政治家であったと著者は評する。

釜ヶ崎については、形成（第七章）、生活構造（第八章）、変容（第九章）、社会調査（第十章）について、それぞれ章を割いている。紙幅も残り少ないので、駆け足で見ている。

釜ヶ崎は、近世の大坂に配置された「非人」村である「四ヶ所」（ちなみに、「穢多」が「かわた」と自称したように、大阪の「四ヶ所」は

「長吏」呼称が公認された)のひとつである。鳶田、そして鳶田墓所と「隠坊開(葬送にたずさわった三味聖の村)」に地図上で重なりながら、その外に膨らんでいる。著者はまず、明治初年の、非人の役目と得分が解体され、屋敷地が落札されていく経緯をたどる。ここには、一八九六年に電光舎という燐寸工場ができる。一八九八年に施行された「宿屋営業取締規則」で木賃宿の営業許可地として今宮村字釜ヶ崎が指定され、東隣の字飛田(鳶田)には工場とその職工たちの住居が形成される。他方で、一八九一年の「宿屋取締規則(本文では「宿屋営業取締規則」と書かれているが、一三九頁表に従えば、誤記であろう)」改定以来、長町のスラム・クリアランスが進んでいくが、長町の木賃宿が釜ヶ崎に集団移転したとの説を著者は否定する。著者は一九〇〇年代初頭の今宮村の人口動態統計から、一九〇二、三年以降、つまり第五回内国勸業博覧会の開催に前後して、木賃宿が急増すると示す。さらに第一次世界大戦後の一九二〇年代に戦後恐慌と都市化とで膨張していく、そのなかで興味本位の「貧民窟探検記」がいくつも書かれ、釜ヶ崎の表象を形成していったとする。

木賃宿は、近世においては長町のそれが口入れ業を公許されていたものが、明治維新後それらの特権を徐々に剥奪されていき、衛生と治安との観点から規制が加えられ、一八八六年の「宿屋取締規則」に収斂する。ただしこの段階では、前章で述べているように、大阪府がめざした長町のクリアランスは成功しない。一八九八年の「宿屋営業取締規則」も、衛生行政においては画期だが、非拘束的だったとする。一九二五年の「改定宿屋営業取締規則」では木賃宿が「簡易宿」と改められたが、その止宿人について、一九二三年の調査から、「雑業」とされる非熟練労働、高齢化もあいまっての不安定就労、「官民癒着」と著者が指摘する、労働力市場のあり方、つまり何重もの「ピンハネ」が介在する体制がすでに確認できるといふ。

言及しつつ、「子弟の教育面には無関心」な実態があったが、不安定就労に起因したとする。横の紐帯が弱かったものが、三〇年代には「顔役」や親分子分関係が生まれてくることを前提に、三〇年代後半から町内会への組織化が進められる。萩ノ茶屋町会連合会の十九町会のうち一〇町会が釜ヶ崎だが、その加入者の「ほとんどが簡易宿の止宿人であると推定される」といふ。「世帯形成層は物資配給の利害に絡んで」の行動であったが、警察当局が主導したこの流れの意図は、産業報国イデオロギーの教化と、これに裏づけられた生活改善であったという。賃金統制にもかかわらず、労働力不足からとりわけ一九四三年あたりには日備労働の賃金は暴騰するのであり、この収入増が生活安定をもたらした。支出において二〇年代には見られなかった公租公課や貯蓄を可能にし、町会への組織化を通じた総力戦体制の支持につながったと論じる。

第十章では本書で活用されている史料をふくめて、近代大阪にかかわる社会調査について、資料集や史料解題論文を紹介したうえで、史料状況を概観し、それらの特徴と問題点を明らかにしている。長くはないので、第七章以降を読む前に、この第十章に目を通すとわかりやすいかもしれない。

最後に著者は、終章で、論点を整理したうえで、研究展望として一九三〇年代の都市部落、総力戦期の労働力市場と共同体再編、維新変革期の部落史研究との接合、戦後の寄せ場史との接合の四点を示す。

すでに与えられた枚数も尽きたので、いわゆる書評はここでは展開しない。かつて駒込武が『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店、一九九六年)で、植民地支配を「串刺し」に論じたいと書いた。そのような接近が待たれる課題は植民地研究だけではない。西浜と釜ヶ崎の近代史を地続きの問題として描こうとするこの意欲作もまた、新たな地平を切り拓こうとする著者の奮闘の歩みそのものだとと言えるだろう。

十分な読書案内ではないかもしれないが、著者には今後とも不勉強な後進を叱咤激励する刺激あふれる存在であり続けていただきたいと、切に願うものである。

(明石書店、二〇二二年五月、六八〇〇円)

教育活動の「見える化」の試み 「伯太高校リーダーチャート」(HERC)の開発と実践 脇田孝豪

部落解放と大学教育 22 (全国大学同和教育研究協議会刊, 2009. 7)

春季シンポジウム 「大学の教育課程として重要なアイヌ民族の権利についての理解を深める」

アイヌ民族の歴史と人権状況 阿部ユボ／大学においてアイヌ民族の歴史や人権をいかに教育実践として位置づけていくか 上村英明／教科書におけるアイヌ民族—日本人(和人)の認識を問う 黒田伊彦

秋季企画 公開シンポジウムと現地調査 「近江における渡来人・朝鮮通信使の足跡と被差別部落の歴史・文化をさぐる」

近江国と渡来人 上田正昭／近江の散所と陰陽師 沖浦和光

近江八幡の部落の歴史 亀岡哲也／滋賀における部落寺院史を巡って—浄土真宗本願寺派(西本願寺)を中心に 仲尾孝誠／朝鮮通信使 仲尾宏

部落解放と大学教育 23 (全国大学同和教育研究協議会刊, 2010. 7)

春季シンポジウム 「企業社会と大学の人権教育」

企業の求める人材と人権意識 小頭芳明／キャリア教育と人権 伊藤一雄／大学における人権教育の課題 石元清英

秋季企画 「糸島半島と唐津湾—『歴史と人権』をめぐるフィールドワーク」

「邪馬台国」論争の今日的な意義—日本史再構築の重要なキーワード 沖浦和光／大陸に開かれた糸島半島 河合修／人権の視点で糸島を歩く 西原茂徳／近世 唐津藩の被差別民 中村久子

部落解放と大学教育 24 (全国大学同和教育研究協議会刊, 2011. 3)

春季シンポジウム 「大学における、これからの同和・人権教育、研究のために若手研究者が先輩研究者に学び・考える」

大学生のための人権教育、教育学研究の視点から 阿久澤麻理子／調査・フィールドワークの視点から 内田龍史／運動の視点から 熊本理抄／歴史研究の視点から 廣岡浄進／なぜ人権教育が後退していったのか 寺木伸明／意識調査から見えてくるもの 神原文子

秋季企画 「大坂・悲田院長吏の世界と『悪所』をめぐって」公開シンポジウムとフィールドワーク

悲田院長吏の世界 中尾健次／悲田院長吏組織と公務・役割 小野田一幸／大阪の「悪所」の歴史と文化—色町・

芝居町・被差別地区～ 沖浦和光

部落解放と大学教育 25 (全国大学同和教育研究協議会刊, 2012. 3)

春季シンポジウム 「法終了後十年目を迎えた都市部落の現在を考える」

変貌する「複合下層」都市型被差別部落における貧困化・高齢化・流動化 岸政彦／法終了後、大阪の都市部落はどのように変容したのか 住田一郎／コメンテーターから 水内俊雄

秋季企画 公開シンポジウムとフィールドワーク 「近江の渡来人と被差別民」

近江と渡来人 井上満郎／湖東・湖南の被差別部落の成り立ちと変遷 亀岡哲也／草津の被差別部落の実態と解放運動 井上薫／近江の被差別民とその文化—「卑賤の野巫医者」をめぐって 沖浦和光

インド紀行(2011年3月 全国大学同和教育研究協議会企画「インド・カースト制度現地研修の旅」から)

インド・カースト制度の現在 國井哲義

門田秀夫先生追悼 門田秀夫会長の思い出 加藤昌彦

部落解放ひろしま 91号 (部落解放同盟広島県連合会刊, 2012. 7) : 1,000円

特集 吉和事件から60年—広島同和教育運動

福山市同和地区実態把握(調査)の最終結果と分析 部落解放同盟福山市協議会

部落史研究報告集 16集 (八幡浜部落史研究会刊, 2012. 6)

近世非人村の成立—和歌山藩城下の場合— 水本正人

白兔とオロチたちの末裔 創作紙芝居「部落の起源・その1」 文: 西園寺千代 絵: 亀井直美

全国部落史研究松山大会フィールドワーク資料 『自由と解放を求めて』 制作: 部落解放同盟松山市連絡協議会

補足 全国部落史研究松山大会フィールドワーク資料

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 26 (信州農村開発史研究所刊, 2012. 3)

松代藩の「水主穢多一件吟味留帳」を読む 松本人権推進古文書研究会

部落の人々の藩への「直訴」とその結果—「田野口陣屋日記」から— 斎藤洋一

ライツ 158 (鳥取市人権情報センター刊, 2012. 7)

今月のいちおし!! 『どんとこい、貧困!』 (湯浅誠著)

田中澄代

50円

人権文化を拓く 179 メルボルンの風を感じて 丁章

日本史研究 599 (日本史研究会刊, 2012. 7) : 750円

大阪人権博物館・大阪国際平和センターの補助金削減・廃止に反対する声明

ねっとわーく京都 284 (ねっとわーく京都21刊, 2012. 9) : 500円

特集 貧困と生活保護問題

ノートル・クリティーク 5号 (ノートル・クリティーク編集委員会刊, 2012. 5) : 1,000円

史料紹介 『京都市編入引継書類』 (京都府紀伊郡柳原町) 奥山典子

はらっば 332 (子ども情報研究センター刊, 2012. 9)

特集 わが町にしなり子育てネットの活動から学ぶ 地域と子どもを結ぶ場を守ろう

ヒューマンライツ 294 (部落解放・人権研究所刊, 2012. 9) : 525円いま、水平社宣言の現代的意義を考える 上 友永健三
走りながら考える 差別助長論文が大阪市のHPに―
「不適切な表現」だけでよいのか― 北口末広**ひょうご部落解放 145** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2012. 6) : 700円

特集 働くことについて考えよう!

連載・牛から命を学ぶ 1 北出一家「精肉一貫作業工場」

太田恭治

本の紹介

『旦那場 近世被差別民の活動領域』 (大熊哲雄/斎藤洋一/坂井康人/藤沢靖介著) 鎌田昌平/『ダーウィンが信じた道 進化論に隠されたメッセージ』 (エイドリアン・デズモンド、ジェイムズ・ムーア著) 橋本貴美男

部落解放 665号 (解放出版社刊, 2012. 7) : 1,050円
第38回部落解放文学賞**部落解放 666号** (解放出版社刊, 2012. 8) : 630円

特集 法人を活用した地域活動

都市の部落と社会的企業 大阪・西成での部落解放運動の挑戦 富田一幸/仕事保障と福祉運動のあゆみ 失対から労働事業協会、「やさしい里」「いきいきの里」へ 部落解放同盟高知市連絡協議会/障害者とともににはたらく 滋賀県甲賀市の「共働事業所けいかん」の取り組み 日高光春/「もったいない」を「ありがとう」に「フードバンクとちぎ」の取り組み 古川勉

本の紹介

大熊哲雄・斎藤洋一・坂井康人・藤沢靖介著『旦那場―近世被差別民の活動領域』 想像しがたいことに迫るこ

と 奥本武裕/高山文彦著『どん底―部落差別自作自演事件』 「きょうだい」をひたすら信じ続けた人々の姿 外川正明/桜井智恵子著『子どもの声を社会へ 子どもオンブズの挑戦』/井上理津子著『さいごの色街 飛田』/安田浩一著『ネットと愛国 在特会の「闇」を追いかけて』

だれにも気づかれない心の叫び 精神障がい親と暮らす子どもへの支援 土田幸子

かくれスポットおおさか案内 7 中津 吉村智博

まちかどの芸能史 18 願人 村上紀夫

部落解放 667 (解放出版社刊, 2012. 9) : 630円

特集 身体芸術と存在の尊厳

本の紹介 『松原三中から始まる物語―解放への光を求める教師たち』 (矢野洋、月嶋楡著) 桂正孝

「未完の行為」を受け継ぐことへ 中尾健次さんの思い出 森実

リバティおおさかの灯を消すな 全国ネットが設立集会

かくれスポットおおさか案内 8 京橋・大阪城公園 吉村智博

「戦後」―いまだ終わらず 上 韓国での強制連行・強制労働被害者聞き取り調査に参加して 川瀬俊治

まちかどの芸能史 19 猿まわし 村上紀夫

部落解放研究 195 (部落解放・人権研究所刊, 2012. 7) : 1,400円

特集 国勢調査を活用した部落問題調査・兵庫県

国勢調査小地域集計から見る姫路市T地区の変化と現状 妻木進吾/国勢調査小地域集計から見る丹波市N地区の変化と現状 堤圭史郎/国勢調査小地域集計から見る神戸市B地区の変化と現状 内田龍史

IEAの「市民性教育国際調査 (ICCS2009)」の概要と結果について 野崎志帆

大阪府民にとっての同和問題 「人権に関する府民意識調査」2005年から2010年へ 神原文子

人権CSR指標の活用に関する一考察 部落解放・人権研究所「人権CSRガイドライン」と韓国国家人権委員会「人権経営自己診断ツール」の比較を通じて 李嘉永

子どもたちの学力水準を下支えしている学校の特徴に関する調査研究 志水宏吉

NPO田川ふれ愛義塾の軌跡と現状 「遊び・非行型」不登校生や社会で苦しみ悩む青少年によりそって 中野直毅・工藤良

非行型青少年の居場所を考える 青少年自立サポート団体「富田ふれ愛義塾」(大阪府高槻市)の活動報告から 畠山慎二

象徴性 川端俊英

人権と部落問題 833 (部落問題研究所刊, 2012. 9) : 630円

特集 教職員の人権

大阪市も地域もこわす橋下流「市政改革プラン(素案)」—「市民交流センター」14年度に廃止— 谷口正暁

本棚 広川禎秀, 山田敬男編 『戦後社会運動史論 2 — 高度成長期を中心に』 佐々木拓哉

文芸の散歩道 排外的ナショナリズムの「野蛮」—泉鏡花作「海城発電」を読む 水川陸夫

人権と部落問題 834 (部落問題研究所刊, 2012. 9) : 1, 155円

特集 現代の貧困と生きる権利

2011年度部落問題研究所定期誌総目次

2011年度部落問題研究所刊行・文献目録

じんけんぶんかまちづくり 36号 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2012. 9)

2012年度「部落問題は今、研究会」報告 平川茂「「両側から超える」立場の普遍性～この間の議論の到達点としての～」

季刊人権問題 368 (兵庫人権問題研究所刊, 2012. 7) : 735円

橋下流「同和行政」の検証 谷口正暁

八鹿高校事件の真実を改めて世に問う

4 全国同和教育研究協議会の八鹿高校の先生を批判した見解は許せない—当時の全同教の実態を明らかにする— (下) 大同啓五/5 『文春』掲載の「タブー・八鹿高校事件」に想う—いまも蠢く“解放教育”の呪縛— 小出克己

季刊「人権問題」の総目次(第25号～28号)

振興会通信 104 (同和教育振興会刊, 2012. 5)

同朋運動史の窓 12 左右田昌幸

振興会通信 105 (同和教育振興会刊, 2012. 7)

同朋運動史の窓 13 左右田昌幸

水平社90年の歴史に学ぶ～私を理解するには勇気が要る～ (ニーチェ) 1 神戸修

信州農村開発史研究所報 120 (信州農村開発史研究所刊, 2012. 6)

矢嶋村の髪結床場 佐藤敬子

引き取りを断られた「無宿」 斎藤洋一

信州農村開発史研究所報 121 (信州農村開発史研究所刊, 2012. 9)

「関所破りの桜」と五郎兵衛用水に関する伝説 斎藤洋一

身同 第31号・第32号合併号 (真宗大谷派解放運動推進本部刊, 2012. 6) : 1, 300円

大谷派における解放運動の歴史と課題

問われるもの、願われるものとしての解放運動—糾弾への呼応 1 訓覇浩/真宗大谷派糾弾会で何を問うたか 小森龍邦/パネルディスカッション 解放運動と同朋会運動 小森龍邦・木越樹・泉恵機・山内小夜子

しんらんさんと考えるハンセン病問題 玉光順正

月刊スティグマ 192 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 7) : 500円

特集 福祉制度改革

月刊スティグマ 193 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 8) : 500円

特集 部落解放第44回東日本研究集会開催

月刊スティグマ 194 (千葉県人権啓発センター刊, 2012. 9) : 500円

特集 大震災

関東大震災時の朝鮮人虐殺と背景 石田貞/福田村事件と差別 鎌田行平

世界人権宣言大阪連絡会議ニュース 345 (世界人権宣言大阪連絡会議刊, 2012. 7)

第29回総会記念シンポジウム [報告要旨] 水平社宣言と90年の運動の歴史から学ぶもの—女性の立場から 塩谷幸子, 鈴木裕子, 古久保さくら, 中田理恵子

地域と人権 1116号 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 9. 15) : 150円

国民的融合論との対話—部落問題解決への理論的軌跡と展開— 21 丹波正史

月刊地域と人権 342 (全国地域人権運動総連合刊, 2012. 9) : 350円

特集 第8回地域人権問題全国研究集会

地域と人権京都 624号 (京都地域人権運動連合会刊, 2012. 7) : 150円

法失効後の京都府の同和行政・同和教育 1 藤谷剛

地域と人権京都 625号 (京都地域人権運動連合会刊, 2012. 7. 15) : 150円

法失効後の京都府の同和行政・同和教育 2 藤谷剛

であい 604 (全国人権教育研究協議会刊, 2012. 7) : 150円

和歌山市子ども会結成60周年を振り返って 吉本拓司

「安心して悩める社会」をめざして～「いのちの集い」で苦しみを分かち合う～ 関本和弘

人権文化を拓く 178 外国人への二重基準 榎井緑

であい 605 (全国人権教育研究協議会刊, 2012. 8) : 1

中尾健次さんを偲ぶ 寺木伸明

国際人権ひろば 104 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2012. 7)

特集 東アジアの都市の生活困難な人たちの現状と支援

こべる 233 (こべる刊行会刊, 2012. 8) : 300円

ひろば 149 全国水平社九〇周年に思うこと—いま運動は何に向き合うべきか 石元清英

『こべる』終刊に寄せて 6 ある日の「同和研修会」から 大橋寛信

部落問題とわたし 4 自らを振り返り、いま考えていること 中村一成

いのちを生きる 53 東北の被災地へ 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こべる 234 (こべる刊行会刊, 2012. 9) : 300円

ひろば 150 「両側から超える」立場からの教育実践—大学における福祉教育の試み 平川茂

『こべる』終刊に寄せて 8 部落問題と出会って考えてきたこと 二木保

こころのつぶやき 4 老人保健施設の光景—母のことなど 鶴飼アユ

いのちを生きる 54 統一プール登校日 長谷川洋子

<幻の銀河>—写真と文 小林茂

濃水飛山記 藤田敬一

こるむ 12 (在特会らによる朝鮮学校に対する襲撃事件裁判を支援する会刊, 2012. 9)

朝鮮学校の歴史 10 寄附金税制上の問題 1 金東鶴

東北朝鮮初中級学校を訪れて—震災以後のハッキョと支援運動の状況 山本崇記

ごんずい 126 (水俣病センター相思社刊, 2012. 8)

追悼 原田正純さん

在日外国人教育 4 (全国在日外国人教育研究所刊, 2012. 8) : 600円

特集 外国籍教員の差別任用に対する日弁連「勧告」

入管法改定と在日外国人 学校現場に与える新在留管理制度の影響 小西和治

<渡来人>考 金井英樹

狭山差別裁判 432号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 3) : 300円

野間宏と寺尾判決 10 庭山英雄

狭山差別裁判 433号 (部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2012. 4) : 300円

野間宏と寺尾判決 11 庭山英雄

しこく部落史 14号 (四国部落史研究協議会刊, 2012.

5) : 500円

讃岐史料にみる被差別民と宗教—『生駒記』史料の金毘羅宮十月大祭の記事を通して— 浜近仁史

祭礼などにおける「かわた」の警固について 水本正人

近世土佐藩社会における博士集団の歴史的展開 山本琢

「三番叟まわし」が果たした民間信仰の一諸相—三番叟まわし調査(徳島県三好市・美馬郡)より— 南公代・中内正子

檀那場をめぐる民間宗教者たちの争い—土佐国の博士集団の組織化をめぐる— 山本琢

讃岐国小豆島盲人支配の一断面 山下隆章

「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進事業報告会より

石神と宿神の考察 2—先住の「地主神」としての位置付け— 五藤孝人

次世代研究 51 (京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」刊, 2011. 8)

在日朝鮮人のナショナル・アイデンティティを再考する—3・4世朝鮮籍者の「共和国」をめぐる語りを手がかりに— 李洪章

多様性と響き合う「在日朝鮮人」アイデンティティ—在日3世学生たちの学びの運動から— 孫・片田晶

在日朝鮮人女性を対象にした識字教育の構造—1970-1980年代京都・九条オモニ学校における教師の主体に着目して— 山根実紀

在日朝鮮人の居住と共同性—「不法占拠」という地平からの一考察— 山本崇記

民族間結婚による「近さ」の再編—2人の在日朝鮮人男性の「特殊」な結婚事例から 橋本みゆき

在日朝鮮人-日本人間の<親密な公共圏>形成—「パラムせんだい」における「対話」の成立条件検討を通じて— 山口健一

祖国とディアスポラ—1970年代韓国映画における在日朝鮮人表象— 金泰植

「見えない朝鮮族」から読み取るエスニシティ論の地平—日本の新聞報道を手掛かりに— 権香淑

社会学評論 249 (日本社会学会刊, 2012. 6) : 1,500円

都市下層における住民の主体形成の理論と構造 山本崇記

日本人の排外意識に対する分断労働市場の影響 永吉希久子

人権と部落問題 832 (部落問題研究所刊, 2012. 8) : 630円

特集 労働者の人権—いのち削られる労働現場

文芸の散歩道 須井一(谷善)の『綿』にみる<綿>の

問題』

ぶらくを読む 71 幕府・地域社会を震撼させた武州鼻緒一揆 湧水野亮輔

解放新聞 2580号 (解放新聞社刊, 2012. 8. 13) : 80円
山口公博が読む今月の本

『めだかの学校の仲間たち一見えなくて聞こえない やっこの手のひらの旅』(山岸康子著) / 『「七人の侍」と現代一黒澤明 再考』(四方田犬彦著) / 『原発のコスト—エネルギー転換への視点』(大島堅一著)

解放新聞 2581号 (解放新聞社刊, 2012. 8. 20) : 80円
解放の文学 76 井伏鱒二と『黒い雨』 音谷健郎

解放新聞 2582号 (解放新聞社刊, 2012. 8. 27) : 80円
戦前の水平社から現在の部落解放運動を生きて 岩田利平 山口県連名誉顧問

今週の1冊 市川寛著『検事失格 「私はこうして冤罪をつくりました」』

解放新聞 2584号 (解放新聞社刊, 2012. 9. 10) : 80円
山口公博が読む今月の本

『子規の宇宙』(長谷川耀著) / 『定義集』(大江健三郎著) / 『城の崎にて・小僧の神様』(志賀直哉著)
今週の1冊 『人類の歴史を変えた8つのできごと 1』(眞淳平著)

解放新聞 2585号 (解放新聞社刊, 2012. 9. 17) : 80円
解放の文学 77 新しい男女観への挑戦 武者小路実篤と『世間知らず』 音谷健郎

ぶらくを読む 72 肉食の誘惑—生肉食・内臓食・焼肉 湧水野亮輔

解放新聞大阪版 1929号 (解放新聞社大阪支局刊, 2012. 9. 15) : 100円

大阪市人権協会が解散

解放新聞京都市版 249号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2012. 7) : 150円

京都市いきいき市民活動センター探訪 岡崎いきいき市民活動センターを訪ねて

解放新聞京都市版 250号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2012. 8) : 150円

京都市いきいき市民活動センター探訪 東山いきいき市民活動センターを訪ねて

解放新聞京都市版 251号 (部落解放同盟京都市協議会刊, 2012. 9) : 150円

京都市いきいき市民活動センター探訪 吉祥院いきいき市民活動センターを訪ねて

解放新聞奈良県版 964号 (解放新聞社奈良支局刊, 2012. 8. 25) : 50円

主張 差別とは何かを改めて考えてみる

架橋 27号 (鳥取市人権情報センター刊, 2012. 8)

特集 それぞれの居場所を探して～つながったり、はなれたり～

架橋でめぐる全国の人権機関 生まれてきてよかったと思える社会をめざして 滋賀県人権センター

語る・かたる・トーク 209 (横浜国際人権センター刊, 2012. 7) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 6 先生!メイシってなに? 外川正明

性同一性障害者としての人生～女性だった25年間、そして男性としてのこれから～ 前田良

語る・かたる・トーク 210 (横浜国際人権センター刊, 2012. 8) : 500円

シリーズ「解放教育」継承への扉 7 荒れていく子どもたちを前にして 外川正明

性同一性障害者としての人生～女性だった25年間、そして男性としてのこれから～ 前田良

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 29 (カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊, 2012. 7)

「忌避意識」脱常識の部落問題 第4回対話集会

カトリック部落差別人権委員会ニュース 140 (日本カトリック部落差別人権委員会刊, 2012. 7)

部落の歴史を見直す～奈良県を中心に～ 2 吉田栄治郎

かわとはきもの 160 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2012. 6)

靴の歴史散歩 105 稲川實

皮革関連統計資料

京都部落問題研究資料センター通信 28号 (京都部落問題研究資料センター刊, 2012. 7)

報告 2012年度部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史 in 西三条

在野の融和運動家・植村省馬 1 吉田文茂

本の紹介 野町均著『永井荷風と部落問題』 田中勝子
収集逐次刊行物目次 (2012年4月～6月受入)

グローブ 70 (世界人権問題研究センター刊, 2012. 7)

野宿者の人権一夜回り活動を通じて— 生田武志

偽物の巫女、生業としての口寄せ 中野洋平

外国籍住民の人口統計からみるジェンダーの問題 仲尾宏

女性の「保護」施設を訪問して 熊本理抄

研究所通信 387 (部落解放・人権研究所刊, 2012. 7) : 100円

LGBT学生支援のアクションリサーチ 加藤慶／<クローゼットから出る>ことの不/可能性 レズビアンをあいだに指定される<分岐点>をめぐる 堀江有里／「ありのままのわたし」を生きるために 土肥いつき

中国帰国生徒の将来展望に関する事例的研究 二つの準拠集団と異化戦略 今井貴代子

「子どもが差別されたことがいちばん悲しい」ハンセン病療養所退所者の60代男性からの聞き取り 黒坂愛衣

「まわりあい」の文化 ある更生施設でかわされたナラティブからの記述 李恵子

解放社会学研究 23 (日本解放社会学会刊, 2010. 9) : 2,000円

ゲイコミュニティ語りの「系譜」 森山至貴

<進路問題>をめぐる教育経験のリアリティ 盲学校教師のライフヒストリーを手がかりに 佐藤貴宣

学校のある風景 中島勝住

特集 スティグマと(性的)健康 HIV/エイズに対する社会(科学)的アプローチ

2000年代・エイズ史第三期の特徴とは何か スティグマ削減という取組を中心にして 岡島克樹/HIV/エイズ研究におけるスティグマと差別概念 新ヶ江章友/演劇セラピーとエンパワーメント タイ-日移住女性たちの経験から 高原幸子

書評×リプライ 三浦耕吉郎著『環境と差別のクリティク—屠場・「不法占拠」・部落差別』 大庭宣尊, 三浦耕吉郎

解放社会学研究 24 (日本解放社会学会刊, 2011. 3) : 2,000円

特集 コミュニティと語りの経験 ゲイコミュニティの事例から

大正期における男性「同性愛」概念の受容過程—雑誌『変態性慾』の読者投稿から 前川直哉/<かぞく>に何を求めるのか—血族家族、選びとる家族、ゲイコミュニティ 三部倫子/動員される<外部>—語り/実態の二文法を超えて 森山至貴

人種とジェンダーとセクシュアリティと制度 狩谷あゆみ

書評×リプライ

武田尚子・文貞實著『温泉リゾート・スタディーズ—箱根・熱海の癒し空間とサービスワーク』 北川由紀彦, 文貞實/ましこ・ひでのり著『知の政治経済学—あたらしい知識社会学のための序説』 郭基煥, ましこ・ひでのり/菊地夏野著『ポストコロナリズムとジェンダー』 野村浩也, 菊地夏野/風間孝・河口和也著『同性愛と

異性愛』 今田匡彦, 河口和也/デニス・アルトマン著『ゲイ・アイデンティティー抑圧と解放』 黒岩裕市 **解放社会学研究 25** (日本解放社会学会刊, 2012. 3) : 2,000円

障害者の就労場面から見える労働観 青木千帆子

帰国運動から考察する在日朝鮮人の「祖国」 鄭栄鎮

歴史感覚と現場感覚の重要性—トロントの地域改善運動から 山田富秋

特集 同和对策事業の光と影—現場とアカデミズムの対話から

共有されない被差別体験—「特措法」期限切れ後の部落差別問題 黒坂愛衣/部落関係者とは誰か? 現代「部落分散」論に抗して—ポスト「同対法」時代における戦略的アプローチ 二口亮治/不可視化されるマイノリティ性—ジモトの部落、在日コリアン、ホームレスの若者たちの研究調査をめぐる軌跡から 川端浩平/「ポスト」同和行政の展開とその課題—住宅地区改良事業と隣保事業という「呪縛」 山本崇記

書評 研雄二・福岡安則・黒坂愛衣編『栗生楽泉園入所者証言集』 吉崎一

リプライ 意味は、語りと語りのあいだに現われる 黒坂愛衣・福岡安則

書評 かどやひでのり, あべやすし編『識字の社会言語学』 だれ/なんのための識字—パターンリズムをこえたユニバーサルデザイン/サポート ましこひでのり

解放新聞 2575号 (解放新聞社刊, 2012. 7. 2) : 120円

山口公博が読む今月の本

『ヘルプ 心がつなぐストーリー』 (キャスリン・ストケット著) / 『日本近代史』 (坂野潤治著) / 『漂着』 (小檜山博著)

今週の1冊 『差別語からはいる言語学入門』 (田中克彦著)

ぶらくを読む 70 本格的な研究の緒についた武州鼻緒一揆 湧水野亮輔

解放新聞 2576号 (解放新聞社刊, 2012. 7. 9) : 80円

今週の1冊 『はじめたばかりの浄土真宗』 (内田樹・釈徹宗著)

解放新聞 2577号 (解放新聞社刊, 2012. 7. 16) : 80円

解放の文学 75 峠三吉と『原爆詩集』 音谷健郎

今週の1冊 斎藤貴男著『「東京電力」研究 排除の系譜』

解放新聞 2579号 (解放新聞社刊, 2012. 8. 6) : 120円

ドキュメンタリー映画「死刑弁護人」 監督齊藤潤一さんに聞く 中村一成

今週の1冊 波多野澄雄著『国家と歴史 戦後日本の歴史

収集逐次刊行物目次 (2012年7月~9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

朝田教育財団だより 17 (朝田教育財団刊, 2012. 8)

朝田善之助生誕110年、水平社創立90周年を迎えて 松井
珍男子

「朝田善之助さんの思い出」と私 秋定嘉和

IMADR-JC通信 170 (反差別国際運動日本委員会刊, 201
2. 6) : 750円

特集 マイノリティと国連人権システム

ウイングスきょうと 111 (京都市男女共同参画推進協
会刊, 2012. 8)

図書情報室新刊案内

『あなたの親を支えるための介護準備ブック』 (小室淑
恵著) / 『主婦と労働のもつれ—その争点と運動—』
(村上潔著)

解放社会学研究 20 (日本解放社会学会刊, 2008. 8) :
2,000円

特集 差別研究とカテゴリー化

「部落を認知すること」における<根本的受動性>を
めぐって—慣習的差別、もしくは<カテゴライズする力>
の彼方 三浦耕吉郎 / 計量研究はいかにして社会的カテ
ゴリーの生成に関与するか 金明秀

野宿者をめぐる「依存する自立」のポリティクス 山北
輝裕

書評×リプライ 野村浩也著『無意識の植民地主義—日
本人の米軍基地と沖縄人』 青木秀男×野村浩也

書評

倉本智明編著『セクシュアリティの障害学』 飯野由里
子 / デニス・アルトマン著『グローバル・セックス』
狩谷あけみ

ヤクザの解放とは何か? 大山智徳

解放社会学研究 21 (日本解放社会学会刊, 2010. 3) :
2,000円

特集 制度とセクシュアリティ

「家族の多様化」の深度を問う Lesbian-motherと精子
ドナーによる生殖・子育ての経験知から 有田啓子 / 性
的少数者の身体と国家の承認 「性同一性障害・特例法」
をめぐって 堀江有里

被差別部落における同和対策終焉以降の高齢者の生活変
化 大阪市内住吉地区における高齢者への聞き取りから
矢野亮

スティグマからの解放、「自由」による拘束 地方都市
で生活する在日コリアンの若者の事例研究 川端浩平
語りにおける脱スティグマ化の戦略 部落出身女性の自
己認識をめぐって 服部あさこ

被差別民の「解放」をめぐるインド社会とNGOの分析 ニュー
デリー市、スラブの活動をてがかりとして 鈴木真弥

解放社会学研究 22 (日本解放社会学会刊, 2010. 8) :
2,000円

特集 「自立支援法」以降の野宿者問題

路上につどう人々 「当事者運動」と野宿生活の狭間 山
北輝裕 / 労働市場へ差し戻されるホームレス問題 再分
配と福祉をめぐる制度の発達・条件・傾向 林真人 /
「ホームレス対策」における「支援」と「排除」の交錯
東京区部を事例として 北川由紀彦 / 困難なく支援>
後藤俊文

小特集 「隠す」ことと「語る」こと—性的少数者の立
場から

事務局よりお知らせ

◇今年度後半期の部落史連続講座の詳細が決まりました。1頁にありますように、今回は全国水平社をめぐって4人の方に講演をしていただきます。是非ふるってご参加ください!

◇前号から高知の吉田文茂さんに植村省馬の紹介をしていただいています。様々なエピソードから浮かぶ植村省馬の姿はしなやかで魅力的です。また、部落差別との向き合い方という観点からもとても興味深い人物です。次回も楽しみです。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分